

# 昭和 34 年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造

## Spatial arrangement of Nishijin textile industry as seen through the distribution of weaving workshops in 1959

阿 部 美 香  
Mika ABE

本論文では昭和 34 年の京都市における西陣織帯地部門の機屋と、買継商及び卸売商の分布を示し、西陣機業の空間構造を解明する。結果、機屋は江戸後期の分布の中核を西側と北側に拡張した、北大路通から元誓願寺通、及び堀川通から千本通が為す、東西・南北の带状地域に集積が認められた。買継商は機屋と近接しつつも機屋と卸商の間である上京区中央・南部に、卸商は中京・下京区の殊に室町・六角・仏光寺通沿いで集積がみられた。

キーワード：西陣織、機屋、分布、京都市、昭和前期

Key words : Nishijin textile, weaving workshops, distribution, Kyoto city, the early Showa era

### I はじめに～西陣織と社会的位置づけ～

本論文では西陣織における産業空間の一端の解明を試みるが、はじめに西陣織とその社会的位置づけを、歴史的展開と共にみておきたい。

西陣織の源流は古代平安京における織部司まで遡ることが可能だと考えられる。平安時代初期には、織部司が機織を主宰したが、平安中期以降、私織の台頭により衰退し、貴族社会瓦解に接して織部司も廃絶した<sup>1)</sup>。織部司の廃絶後、織部町に居住していた工人達が太舎人町に移り、民業として機織を始めたのではないかと考えられている<sup>2)</sup>。また私織が盛んになっていた当時、元々織物とは無関係の職掌であった太舎人が、貴族治世崩壊後に機織を始め、旧織部司の工人と共に民営として機業を営み、機業が太舎人町で優勢になったといわれる<sup>3)</sup>。当初の職掌以外の者も織物業を営み盛んになっていったことから、織物業が社会的に必要とされ、生活をするための職として選択肢に上る存在であったことがうかがえる。

この太舎人の機業が、大宮の絹と共に民業としての京都機業の基礎を築いたとされ<sup>4)</sup>、その根源には織部司がある、ということからも隆盛していくが、その後応仁の乱で廃絶の危機に立った。太舎人町も兵火に罹り、戦火を避けて新興機業地として台頭していた堺などに職工達も逃れた。応仁の乱後、再び今出川新町辺りにかつての機業者達が集まり復興し始め、後に北西に多

く移り、西陣での機業が盛んになった。その後豊臣期に大いに発展し、慶長期には一般庶民の間でも紋織物の使用が増え、元禄期の奢侈盛行で西陣機業は繁栄した<sup>5)</sup>。

徳川政権下において、当初西陣織は高級織物として幕府や朝廷、公家そして寺社から優遇された。幕府の直轄都市京都には、大名の呉服所が167軒存在し、西陣で生産された織物が全国の諸大名の元へわたった<sup>6)</sup>。幕府は、生糸や米価高騰時には西陣への救済措置を下し保護すると同時に、華美な衣裳の生産を抑制する法令によって西陣での高級織物生産の統制をもちかっていた<sup>7)</sup>。そのことから、西陣織が「御用達」品として保護すべき重要な産物である一方、市井統制の面からはその高級性により野放しにはできない存在であったことが分かる。

享保の大火災(1730年)は西陣焼とも呼ばれ、7000余あった織機のうち3000余が焼失する大惨事となった<sup>8)</sup>が、延享2(1745)年には幕府公認の株仲間が結成され、西陣機業は営業の独占権を得るに至った<sup>9)</sup>。しかし天明の大火(1788年)で再び惨事を被り、その後天保の改革では株仲間の解散を余儀なくされた。天保の改革ではまた倹約と高級織物の製造・売買・使用の禁止が求められ、独占権も官からの保護も失い、西陣機業は木綿織で窮地を切り抜ける他なかった<sup>10)</sup>。嘉永6(1853)年には株仲間である高機八組仲間の再興を果たす<sup>11)</sup>ものの、幕末にあつては地方機業の全国市場への進出や、生糸の高騰と買い占めにより、西陣機業の多くは苦境に立たされた<sup>12)</sup>。

明治に入ってもその初期には苦境が続いた。すなわち他産地との競争に加え、粗悪品濫造がやまず、古来からの製織法を守る織屋が不況に陥っていた<sup>13)</sup>。粗悪品流通を阻止するため、明治10年代には様々な組織の創設が試みられた。たとえば明治10(1877)年に京都府知事の認可を受けて西陣織物会所が開設され、原糸の仕入れ段階から府が免許鑑札を下付し、無鑑札者による製造と販売を禁止した<sup>14)</sup>。また明治18(1885)年には取引改善と粗製濫造防止のため、西陣織物市場が開設された<sup>15)</sup>。前者は無証紙での販売が行われ閉鎖に至り、後者は違反者が続出し創設の2年後には休業した<sup>16)</sup>が、精良品流通を保護するための方策によって、「西陣織」の銘柄を守る努力が続けられたということはいえるだろう。

一方で明治10年頃からジャカード織機や飛杼ボタンという洋式織機が導入され、西陣機業における技術革新が進んだ<sup>17)</sup>。そして周知のように、幕末から明治初期に衰微した京都は維新後、産業発展に力を注いだが、その中で西陣織が重要な位置を占めていたことも次の事実から分かる。

まず明治16(1883)年刊行の『京都商業会議所沿革』「都下商工業ノ現況調査」「織物」の項目には、「我京都ノ織物ニ於ケル、独り西陣織物アリ」<sup>18)</sup>とあり、当時の京都経済における織物産業として、西陣織が最優位にあつたことがうかがえる。

また、明治25(1892)年9月に京都商工同盟会から発行された『第四回内国勸業博覧会ハ京都ニ開設スルヲ適当トスル意見書』における「京都市重要工芸品産額表」では、第一項目に西陣織が挙げられ、その製作価格が他の工芸品に比して群を抜く状況が記されている。製作価格の

一部を挙げると、西陣織物が 5,526,477 円、染呉服が 1,268,620 円、陶磁器が 154,380 円、漆器が 76,490 円<sup>19)</sup> 等であり、一覧の中で西陣織が他を圧倒して高額であることが分かる。

明治の西陣機業は、国内向けの大衆織物や海外向け織物に比べ、国内向けの高級絹織物の需要が小さかったため、他の地方機業の台頭にも押され、織物業における社会的位置は相対的に低かったとされる<sup>20)</sup>。しかし上記から、少なくとも京都の産業躍進にとっては起爆剤となりうる重要な存在の一つであり、遷都 1100 年祭と内国勸業博覧会の同年開催により、京都の確固たる発展を期する京都市また京都経済界にとって、西陣織は博覧会誘致に向けた説明に欠かせないものであったと考えられる。

大正期においても、主要工業生産物として西陣織物の生産額は、染物や陶磁器、酒類等他に比して抜きん出ており<sup>21)</sup>、京都の産業にとって重要なものであったといえる。

昭和の戦時中には統制下に入り、殊に昭和 15 (1940) 年の七・七禁令(奢侈品等製造販売制限規則)施行で販売禁止となる織物が大半になると、4448 人の失業者が出た<sup>22)</sup> が、命脈を保って戦後回復し、高度経済成長期には過去最高の生産量を記録した<sup>23)</sup>。

## II 先行研究と本論文の視点、および分析対象年と方法

### 1 既往研究と本論文の視座・目的

上記のような西陣織に関する既往研究は、大正初期から昭和 40 年代までに大著が出ている。まず本庄 (1914, 1930) は、西陣史をまとめた上で、西陣機業における生産・販売の組織構造に関し、その全体像を明らかにした。その中で機業家と仲買人の取引関係に言及し、主として機業家と直接取引をし織物を買受け集約する上仲買と、上仲買から織物を購入し、京都市内の小売店また地方の卸売商に織物を売り渡す下仲買という二種の仲買体制を解明している点を、西陣織の流通構造に関する重要な事柄として特筆したい。次に堀江・後藤 (1950) は、西陣織生産の各工程に着目し、糸の撚糸から染色、整経、紋紙製作、そして機織に至る各工程の労働者数や専業兼業の別、経営規模について提示した。堀江・後藤はまた、機織業における零細性と、力織機に比べ手織機の比重の高さにも言及した<sup>24)</sup>。このことは、京都における歴史的産業であり、近代の産業振興で主軸の一つとされ、他に抜きん出た生産額を誇る西陣織が、個々の「零細」な機屋の生産によって成り立っていたということを示す点で重要である。

そして黒松 (1965) は、西陣機業の生産構造、労働条件、そして原料糸に関し、昭和 30 年代後半における変化を論じている。黒松は「西陣機業の現状は未だ零細機業家の比重が重く、その製品は品種、柄行の多様性を身上としている」<sup>25)</sup> としながらも、「最近の西陣機業」における動向として、桐生や十日町といった地方絹機業との競争から、「多種少量生産より、大衆品を主とする小種多量生産の動きが生じてきている」<sup>26)</sup> と述べ、また保守的とされてきた帯地部門であっても、10 台以上の織機を有する大規模工場が出始めている、としている。黒松は昭和 30 年から昭和 34 年の手織・力織機、また生産品目に関する統計データと、昭和 37 年の同データと

の比較から生産構造の変化を述べている。黒松のこの見解は、西陣織の生産構造に変化が見え始める時期が少なくとも昭和35年以降、すなわち昭和30年代後半であると示す<sup>27)</sup>ものとして意義深い。

さらに西陣織の流通構造について黒松は、戦後西陣機業の規模拡大に伴って、機業家が上仲買を通さずに直接下仲買と売買取引をする場合や、上仲買が下仲買を経ずに地方卸売商と取引をする場合も生じてきたと述べている<sup>28)</sup>。しかし一方で、買継商と称される上仲買と取引する機業家の割合は、「固有西陣織」<sup>29)</sup>たる帯地・着尺両部門で8割を占め、「買継商が西陣織の販売に果たしている役割は非常に大きい」<sup>30)</sup>としている。これは買継商の西陣機業における必要性が存在し続けていることを提示する点で重要といえる。

この他、佐々木(1932)が古代に端を發する西陣史についてまとめ、各組合史<sup>31)</sup>も出版されるなど、西陣織産業の史的変遷に関する研究成果がある。また1970年代半ばから1990年代半ばにかけての西陣織生産・出荷数や西陣織関連企業数の推移を検討した論考もみられる<sup>32)</sup>。

上記のような先行研究において、西陣織産業における組織構造や産業成立の仕組み、そして労働状況や史的展開に関して解明が進んでいるといえる。一方で、莫大な生産額を誇る西陣織そのものを作り、「零細」と把握される生産者が京都市のどこに所在しているか、という空間的な分布の実態については未解明の部分が多い。たとえば「西陣」の範囲に関する言及はあっても<sup>33)</sup>、個々の生産主体の分布が地図をもって示されるということは、殆どなされてこなかった。よって本論文の視点および目的は、「零細」とされる西陣織生産者の地理的分布を明らかにし、西陣織流通に関わる仲買商の分布とともに、その産業空間の一端を示すことにある。

## 2 検討対象年および分析対象・方法

前節で取り上げた先行研究の中で、昭和30年代後半に西陣機業において変化の兆しが現れ始めたという黒松(1965)の指摘と研究成果は、裏を返せば昭和30年代前半までは、前時期的な状況、すなわち生産主体の零細性がより高い状態であるということの意味する。また、西陣機業界において初の生産構造統計調査が昭和30(1955)年に実施され、その結果が現在にも続く『西陣年鑑』初刊に掲載されたのが昭和31(1956)年であることも注目される。すなわち前時期的な状態を強く引き継ぎつつ、今日につながる生産状況把握の基礎が築かれたという両側面を持つのが昭和30年代前半といえ、その重要性から同時期を本研究の検討対象時期と設定する。

西陣織産業に関わる主体の所在を明らかにするためには、個々の生産者や流通業者の位置を明示する必要があるが、そのような位置把握には、個々の生産者・流通業者の所在地が載る名簿が適する。西陣機業に関し、それら主体の在所知りうる資料として組合員名簿が挙げられるが、先に触れた『西陣年鑑』には統計調査結果とともに組合員名簿も掲載されている。昭和30年代前半には、昭和31(1956)年、昭和34(1959)年と2回の発刊がなされている。

ここで『西陣年鑑』の昭和31年版と昭和34年版を比較してみる。まず昭和31年版に記載さ

### 昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

れる第1次の統計調査結果<sup>34)</sup>は、業者軒数、法人・個人の別、帯地・着尺・金襴・ビロード・綴といった各部門別軒数、力織機・手織機の別とその台数、製織品種、従業員数などであるが、生産量や生産額については統計が取られておらず、記載がない。その第1次調査は、第2次調査報告書の冒頭で「西陣機業構造を静態として表現している」<sup>35)</sup>と評価される。対して昭和34年版には、第2次の統計調査結果として、第1次の調査項目を基本としつつ、それに加えて総生産量・総生産額その他、部門別・月別・原料別生産量や生産額などの「生産動態」<sup>36)</sup>が掲載されている。第2次の統計調査項目は、現在の『西陣年鑑』における同項目まで継続されていることから、昭和34年版記載の統計調査が、その後の『西陣年鑑』における統計調査の基礎といえるだろう。

また第2次調査が実施された昭和33（1958）年は、現在まで続く西陣織工業組合の母体の一つ、西陣絹人絹織物工業組合が発足した年でもある<sup>37)</sup>。同組合は翌昭和34年には西陣織物工業組合と改称し、同年の『西陣年鑑』発刊も同組合によって行われた。後に二組合と合併し成立した西陣織工業組合<sup>38)</sup>が今日まで『西陣年鑑』の発行を続けていることから、組合組織や発行主体の面からも、昭和31年版に比べ昭和34年版の方がより、後年の同年鑑の原型といえる。

さらに組合員名簿に掲載され、その所在を把握しうる人数に関し、たとえば機屋の主軸となる帯地部門では、昭和31年版では419名<sup>39)</sup>であるのに対し、昭和34年版では1017名<sup>40)</sup>と倍以上となっている。ここから、当該時期の生産者分布に関し、昭和34年版がより全体像を把握しうるものと考えられる<sup>41)</sup>。

以上から本論文では、静態・動態両面の機業統計調査の結果が掲載され、名簿に記載される組合員数もより全数的と判断しうる昭和34年版『西陣年鑑』を使用し、分析対象となる生産者の所在地を把握することとする。昭和34年版『西陣年鑑』には、前述のように第2次機業調査の結果、および氏名・住所・電話番号・学区・取扱品種等が載る組合員名簿<sup>42)</sup>の他、各機業店や織物会社、買継商や卸売商、織機会社等の広告、発行年周辺における西陣織関連行事の写真、町名一覧、業者索引が掲載されている<sup>43)</sup>。

表1は昭和34年版『西陣年鑑』に掲載される、西陣織各部門の機屋軒数、および部門別織機稼働台数・年生産量・年産額を表すものである<sup>44)</sup>。軒数に関し、「兼業者」とは他産業との兼業ではなく、たとえば帯と着尺の兼業や帯と金襴の兼業等、同じ西陣機業内における部門間での兼業を指す。表1から、帯地部門の生産者が最も多く、機屋全体の中で中心的なものであることが分かる。帯地と着尺両部門は、「西陣機業の二大有力部門たる帯地・着尺」<sup>45)</sup>と評されるが、帯地部門がより零細性と保守性が多く残るとされる<sup>46)</sup>ことから、本論文では帯地の生産者を機屋の分布を提示する対象とする。また生産者がつくり出した帯を流通させる業者との空間関係を検討するため、上仲買にあたる買継商、および下仲買にあたる卸売商の所在地分布も同時に示していく。

以上から本論文での検討対象は、西陣織物工業組合の組合員名簿に載る帯地部門1019軒<sup>47)</sup>、

西陣織物買継協同会の名簿の中で、帯地部門に記載される買継商 35 軒、京都織物卸商協会の名簿に載る業者のうち、西陣織を取り扱う卸売商 60 軒とする。

分析手順としては、まず上記組合員名簿に記載される住所から生産者と流通業者の位置を特定し、GIS を用いて分布図を作成する。次に機屋については扱う数が多く、重なる点が多数存在するため、点密度分布図を提示する。

以下、Ⅲ章で地理的分布の結果を示した後に、Ⅳ章でその空間構造の特徴について考察していく。

表 1 西陣織各部門の機屋軒数・織機稼働台数・年生産量・年産額

品種	機屋軒数			織機稼働 台数	年生産量	年産額(円)
	専業者	兼業者	計			
帯地	919	78	997	7624	3,373,018(本)	6,688,411,655
着尺	407	44	451	6617	2,269,713(反)	10,427,016,300
金襴	144	37	181	833	3,441,318(曲尺)	769,910,227
広巾	24	7	31	835	3,917,654(ヤール), 30(枚)	1,148,107,340
ネクタイ	41	30	71	488	881,574(ヤール)	852,628,550
ピロード	67	22	89	321(有線)	881,883(曲尺)	305,803,008
				45(無線)	177,164(ヤール)	63,954,800
肩傘	11	24	35	188(ショール・ マフラー)	1,609,073(枚)	611,131,665
				57(パラソル)	277,490(ヤール)	66,247,040
その他	10	8	18	65		56,984,566
合計	1,623	250	1,873	17,073		20,990,195,151

注)『西陣年鑑』(1959年)より作成。

### Ⅲ 機屋・買継商・卸商の分布結果

次章での考察に先立ち、本章ではまず各々の分布図を示していきたい。

#### 1 機屋(帯地部門)の分布

図 1 は、西陣織物工業組合の組合員名簿に載る機屋の中で、帯を生産していた 1019 軒の所在地を表す分布図である。図 1 の広域図から、機屋の分布が北は上賀茂、東は東山、南は九条、西は北嵯峨まで及んでいることが分かる。また全体をみると、比較的集積が認められる範囲が、北山通、烏丸通、丸太町通、西大路通に囲まれる地域であることも読み取りうる。ただ図 1 では分布点の重なりが多く、集積の程度が判別しづらいため、その分布密度を図 2 に表した。

図 2 では機屋の分布数によって、100 m<sup>2</sup>の区画ごとに色分けをして示している。色が濃い順に、機屋が 17 軒以下、13 軒以下、10 軒以下、7 軒以下、4 軒以下、2 軒以下であることを表

昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

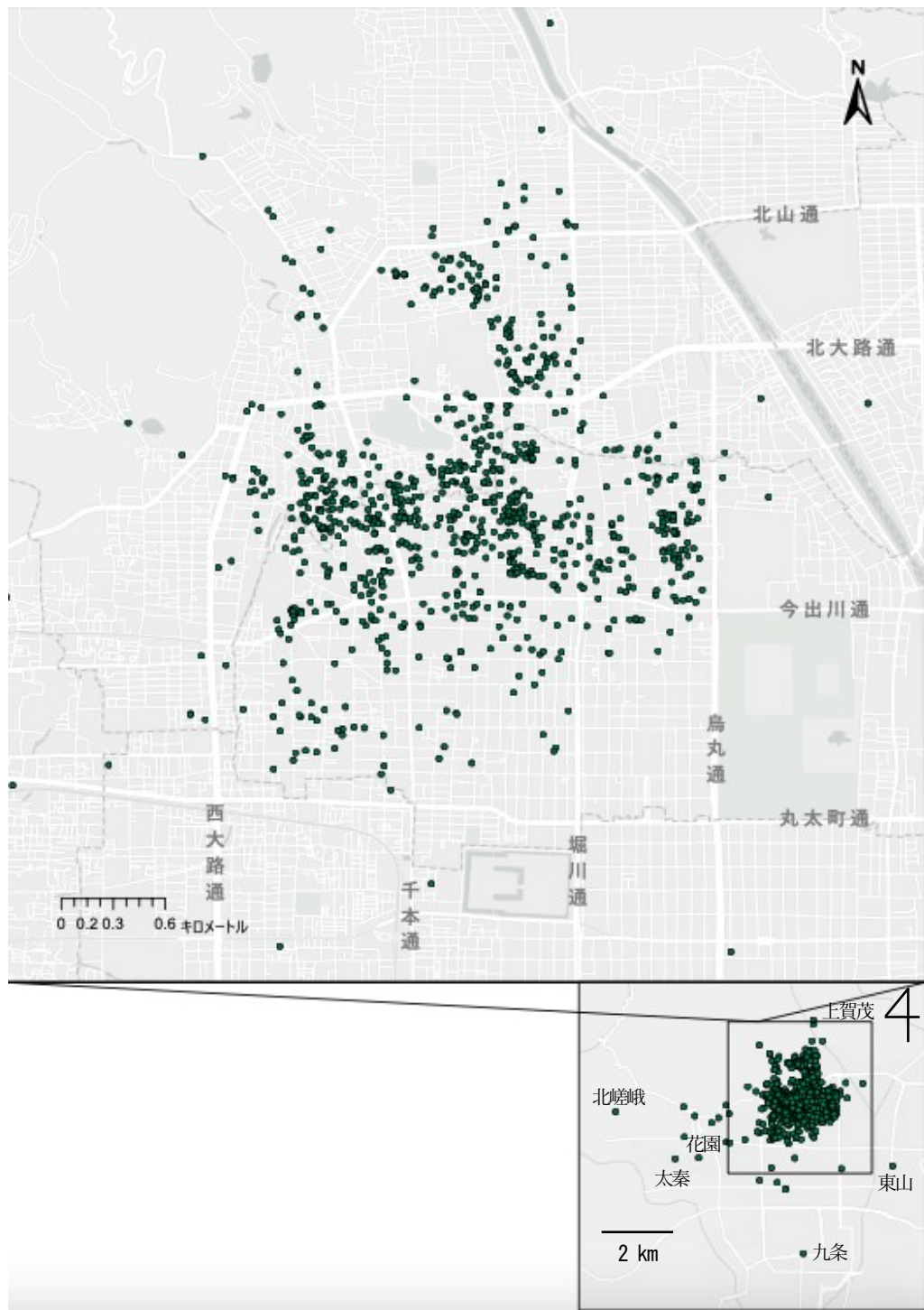


図1 1934年における西陣織帯地部門の機屋分布  
注) 『西陣年鑑』(1959年) をもとに ArcGIS Pro により作成。

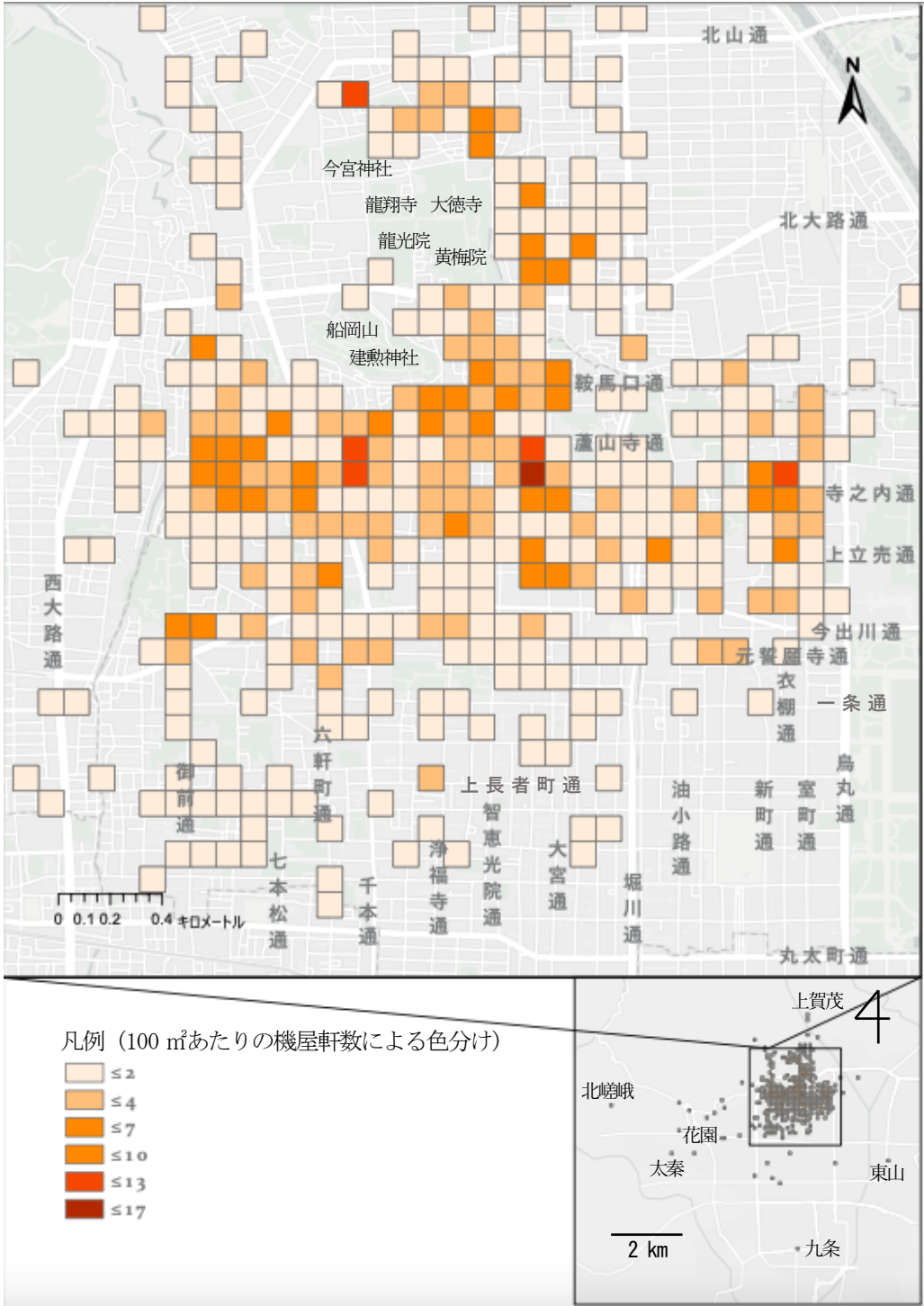


図2 1934年における西陣織帯地部門の機屋分布密度  
 注) 『西陣年鑑』(1959年)をもとにArcGIS Proにより作成。



昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

す。この図2から、北大路通から元誓願寺通にかけて、4軒あるいは7軒以上の比較的まとまった帯状の集積が東西方向に認められる。また南北方向に目をやると、北大路通よりも北側まで4軒あるいは7軒以上の集積がみられる地域は、堀川通から千本通にかけての一带であることが分かる。北大路通の南北には建勲神社・大徳寺・今宮神社といった寺社群や船岡山が存在しているが、それらの敷地の北側にもまとまった集積が認められる。

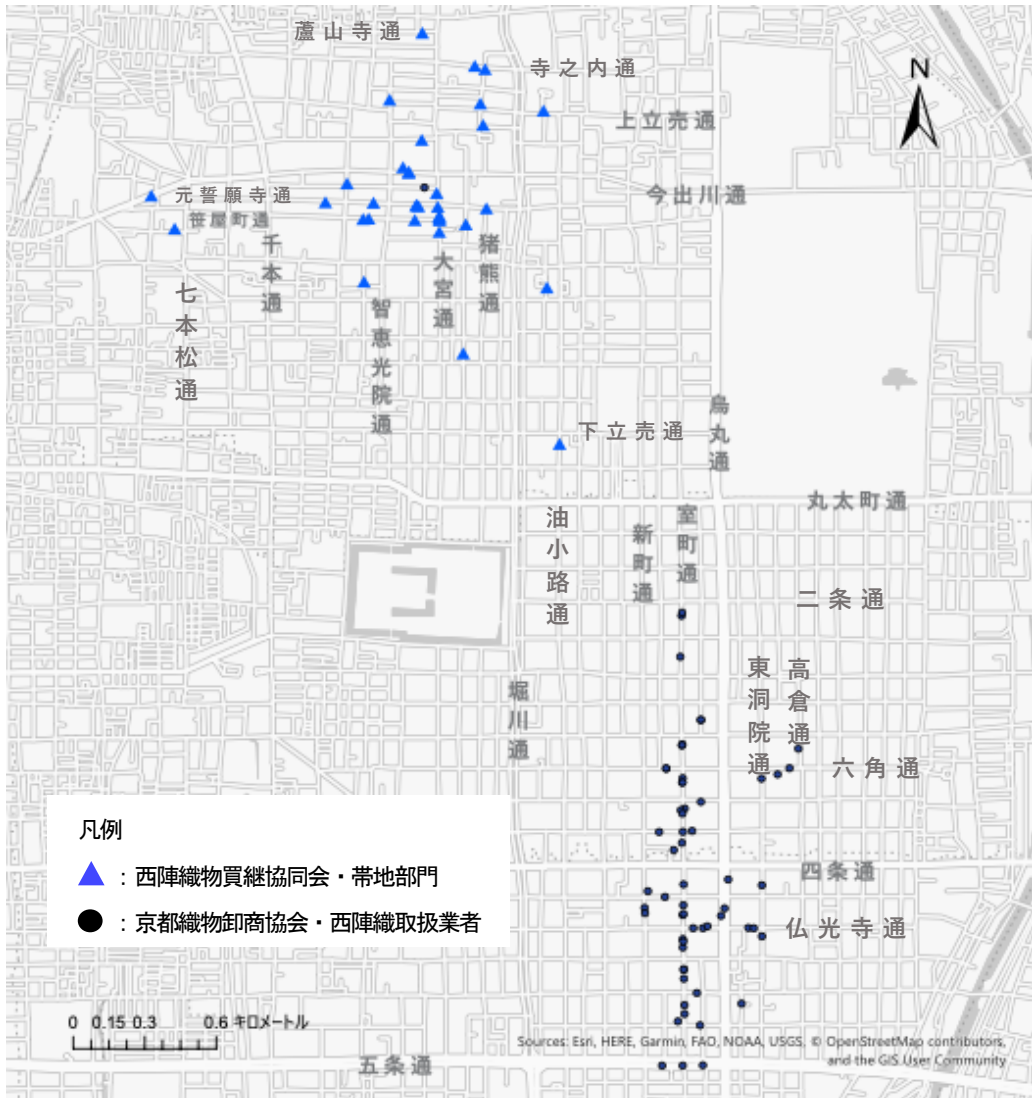


図3 1934年の西陣織物買継協同会・帯地部門と京都織物卸商協会・西陣織取扱業者の分布  
 注)『西陣年鑑』(1959年)をもとにArcGIS Proにより作成。

## 2 買継商（上仲買）と卸売商（下仲買）の分布

次に図3は、西陣織物買継協同会と京都織物卸商協会の組合員名簿において、前者は帯地部門の組合員すなわち帯を取り扱う買継商と、後者は西陣織を取り扱う卸売商を抽出し、その所在地の分布を示した図である。図3における青三角が買継商を、黒丸が卸売商を示す。

この図3から、まず全体の分布傾向として、西陣織の帯地を扱う買継商は丸太町通よりも北側に全てが位置し、卸売商は丸太町通よりも南側に大半が分布していることが分かる。つまり買継商の集積は上京区に、卸売商の大部分の集積は中京区と下京区に、それぞれ明瞭に分かれていることを指摘しうる。さらに分布数から各々の傾向をみると、まず買継商は今出川通よりも南側に多く分布し、一方卸売商は、室町通沿いにより多くの集積が認められ、六角通・仏光寺通沿いにもある程度のまとまった分布が見て取れる。

## IV 考察

本章では、Ⅲ章で示した分布図に基づき、西陣織帯地生産者である機屋、また流通業者である買継商と卸売商の分布状況から、その空間構造について考えていきたい。

### 1 機屋（帯地部門）の分布

図1から、機屋が遠くは上賀茂、東山、九条、北嵯峨まで分布し、比較的まとまった集積が認められる範囲が北山通、烏丸通、丸太町通、西大路通に囲まれる地域であることが明らかとなった。また図2から、機屋分布の中核をなす地域において、さらなる帯状の集積が認められた。この空間構造の意味を、過去の西陣織の機屋分布との比較から考えてみたい。

過去の西陣機屋の分布を知り得る数少ない史料として、『西陣天狗筆記』<sup>48)</sup> 付属の絵図が挙げられる。『西陣天狗筆記』上下二巻は、江戸期を通じて公家、幕府、諸大名の御用を達した「御寮織物司」六家の一つ、井関家の織匠である井関政因（1797-1858）<sup>49)</sup> が天保15（1844）年から嘉永3（1850）年にかけて<sup>50)</sup> 記した。その内容は、織物の起源や西陣地名の起こり、西陣機業において重要な紋織物を井関家の祖先が考案したこと、西陣大火前後における機屋や織機数についての記録、道具の変遷、そして奉行所に提出した複数の口上書記録である。政因が『西陣天狗筆記』を記した幕末の西陣機業は、天保の改革による絹織物禁止後の疲弊が残存し、かつ糸高値や新興の機屋による粗悪品流通で苦境に立たされていた<sup>51)</sup>。12歳で御寮織物司を相続した政因にとって、西陣織が繋いできた歴史を守りながら、その銘柄を存続することは至上の願いだったろうと考えられる<sup>52)</sup>。政因は嘉永2年に奉行所へ提出した口上書の筆頭（こ名）を連ねながら、「当地第一之名産」である西陣織だが、「手抜き織物」の乱立で「素人を相惑」され害を被っている、このままでは御用品や諸家の御官服の製作にも支障が出てしまう、と必死の声を上げている<sup>53)</sup>。天保の改革による西陣織の危機で、機業内に死者も多く出るという中<sup>54)</sup>、西陣織の誇りと正当性、必要性を、『西陣天狗筆記』の上梓によって訴えた、と考えることも可能だろう。

### 昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

そのような同書に含まれる機屋の所在を示す絵図は、まさに「真の西陣機屋はここである」と示す意味があり、「名家」正統派の機屋である政因が「ここは西陣織の機屋として印して良い」と当時認めた機屋が掲載されている、と捉えることもできる。

『西陣天狗筆記』付属絵図には、西陣織の「高機」および高機以外の「織屋」の位置が、地図上に色が塗られることで示されている。高機とは、模様のある美しい織物を織り出し得る織機である。職人がその上部に乗り、模様を織るために必要な経糸を操って、下方の織り手と声を掛け合いながら機織をするというものであり、当時西陣織屋の大部分で使用された<sup>55)</sup>。この『西陣天狗筆記』付属絵図から分かる機屋分布と、本研究で明らかにした機屋分布とを比較考察してみたい。

『西陣天狗筆記』付属絵図を下図として、同絵図における「高機」及び高機以外の「織屋」の位置を色付けしたものが図4である。図4では、高機を所有する機屋の位置を赤色の線で、高機以外の織機を持つ機屋の位置を黄色の線で色付けした。まず図4からその分布の範囲をみると、高機とそれ以外の織機による機屋、両者を総合した場合、絵図の最北には船岡山や今宮神社御旅所が描写され、機屋は鞍馬口通の少し北側あたりに分布の北限がある。東端は寺町通の西側、南限は上長者通の少し南側、西は七本松通の少し西側まで分布することが分かる。

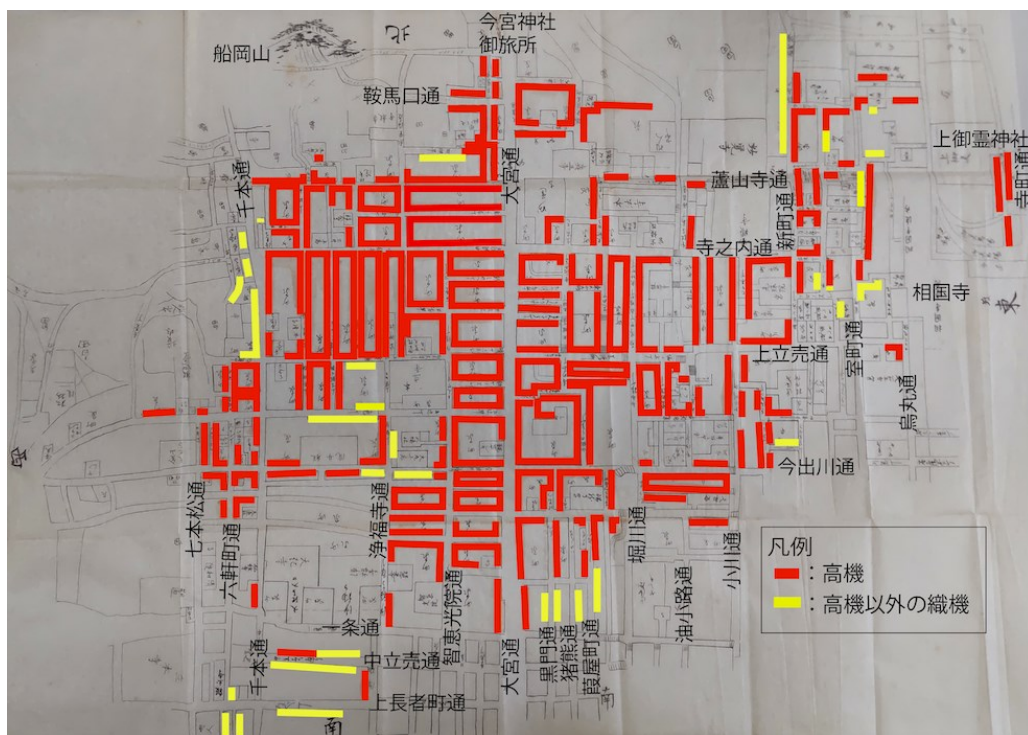


図4 『西陣天狗筆記』付属絵図に表される江戸期の機屋分布

注) 『西陣天狗筆記』付属絵図（1844-1850頃、京都大学文学研究科図書館蔵）を下図として作成。楷書体通り名・事物名・色線・凡例は筆者加筆。

ここで、昭和34年の機屋分布を示した図2と上記図4を比較すると、図4における分布域には、図2においても分布が存在し、両者の重なりが認められる。一方、図4に比して図2は、殊に北方向・西方向・南方向における分布の拡張がみられる。図2の拡張域の中でも特に集積が顕著な場所に着目すると、東西方向では、およそ北大路通と、元誓願寺通あるいは一条通で形成される地帯の千本通以西、南北方向では、堀川通と千本通に挟まれる地帯の、蘆山寺通よりも北側、ということが出来る。この東西、南北方向の拡張地帯はそれぞれ、図4における分布の中核地帯の延伸上に存在するとみることもまた可能だろう。

この拡大がいつ起こったのかは、明治中期以降の発展期、戦後の高度経済成長期など複数の可能性が考えられ、本研究のみでは明らかにすることはできない<sup>56)</sup>。だが、分布範囲の拡大に関し、少なくとも江戸時代後期に西陣機屋の要部であった地帯から、西方向また北方向に伸びていった、ということは考えられる。東方向および南方向よりも、西そして北側への分布域拡大がなされた背景については他稿を待たねばならないが、少なくとも、相国寺や御所などの動かし難い事物や、後述の間屋も含め他業者の所在が比較的少なかったことは理由の一つだろう<sup>57)</sup>。

以上を換言すると、昭和34年における西陣織の機屋分布は、明治期以後の盛衰や戦時期の大失業期を経てもなお、少なくともその100年前からの連続性を有し、江戸後期の機屋分布における中核地帯の延長線上に拡大しているといえる。

## 2 買継商（上仲買）分布と卸売商（下仲買）分布

次に買継商と卸売商の分布を考えてみたい。買継商と称される上仲買は、「そのすべてが零細」<sup>58)</sup>であり、戦後の統制撤廃後に創設された店が多い<sup>59)</sup>とされる。下仲買に比べその規模は小さく、西陣機業とは「古くから緊密な関係を結び、原糸の購入・意匠の考案などの生産面から、製品の販売・融資などの面まで多大の援助を与えてきた」<sup>60)</sup>というように、機屋と密接な関係を持つ存在である<sup>61)</sup>。

黒松(1965)によると、昭和36年時点で、買継商一企業あたりの平均取引機業家数は帯地部門で96軒<sup>62)</sup>に及び、また同じく買継商一企業あたりの平均販売先問屋数(卸売問屋数)は帯地部門で78軒<sup>63)</sup>である。さらに、帯地部門で15%にも及ぶ返品にも対応し、まさに機屋と卸売商の間に立つ存在であったことがうかがえる<sup>64)</sup>。

多くの機業家と結びつき、織物という商品を卸商に売り渡して、返品がある場合にはそれも引き受ける、機業家に近接する位置に業を営み様々な事態に臨機応変に対応しつつ、うまく取り成していたことが想像される。

そのような買継商の分布を図3からみると、北は蘆山寺通、南は下立売通、東は油小路通、西は七本松通の西側まで分布があり、全体として機屋に近接する位置に所在していることが分かる。さらにその分布の偏りに着目すると、南北の通りでは猪熊通や大宮通、東西の通りでは元誓願寺通や笹屋町通で集積が認められ、分布の数を数えると、今出川通以南、すなわち機屋分布

の心部よりも南側に多くが集中している。このことは、機屋に近い存在として緊密なやり取りをしつつも、機屋と卸売商との間に立つ存在として、双方との取引を行いやすい場所に位置していると考えられるのではないだろうか。

次に卸売商の分布を考えていく。西陣織に限らない織物の卸商に関しては既に複数の言及があり、たとえば立命館大学人文科学研究所（1957）は、室町通に沿い、最大二条通から六条通までの間に卸商の店舗が軒を連ねる一帯を、「室町問屋街」<sup>65)</sup>としている。そして特に三条通から五条通の間における、織物卸商の顕著な分布を明らかにしている。また京都織物卸商業組合（1979）は、西陣織物の卸商（下仲買）と地方絹問屋商人、そして両者を共に取り扱う呉服問屋商人の三者が室町通沿いに店を構える商人の主流であるとした<sup>66)</sup>。さらに上記二書ではそれぞれ昭和30年、同32年における「織物問屋」の分布が示されている<sup>67)</sup>が、いずれの研究においても、西陣織に特化した分布の解明はなされていない。元々西陣織物のみを取り扱っていた下仲買は、地方絹の京都流入が増すに従いそれらの売買も兼ねるようになり、西陣織のみを扱う業者は減少していったとされる<sup>68)</sup>。本研究で京都織物卸商協会の名簿から抽出した卸売商も、西陣織のみを取り扱う業者は19軒、西陣織物と染呉服、白生地、関東織物など、複数の織物を同時に取り扱っている業者が41軒であった。しかし本研究の図3によって、少なくとも西陣織を取り扱ったことが確実な卸売商の分布を示し得たといえる。

図3をみると、一部上京区に分布がみられるものの、大半は中京・下京区に分布があり、北は二条通、南は五条通、東は高倉通、西は新町通で囲まれる範囲に所在していることが分かる。さらに、南北の通りでは室町通沿い、東西の通りでは六角通、また仏光寺通沿いで集積が認められる。ここから、「室町問屋」の源流たる西陣織物を扱う卸売商は、室町通を中心に分布しつつ、東西方向への延伸もなされていったことがうかがわれる。上記のような分布をみせる卸商の営みによって、京都府内、そして東京・大阪・名古屋・その他北陸や中部<sup>69)</sup>など、他地域へ西陣織が流通していったと考えられる。

## V おわりに

本論文での分析から、昭和34（1959）年において、西陣織の機屋は広域に分布がみられるが、その中核域は江戸後期の分布要部の延長線上に分布していること、買継商は機屋と近接しつつ、機屋と卸売商との間に所在し、卸売商は旧来からの室町通沿いの他、東西の通り沿いにも集積していたことが明らかとなった。それら機屋と買継商、卸売商が相互に関わり合いながら帯が生産され、京都府内、そして他府県へと西陣織物が流通していったと考えられる。

本論文で明らかにした空間構造は、西陣織物産業の主要部分ではあるが、全体とはいえない。機屋にも表1で示したように、着尺、金欄、広巾など様々な部門があり、またそれぞれの機屋は買継商のみならず、多数の職人たちと結びついていた。たとえば紋を考案する職人たちや、織機を作る職人たち、そして機織で使用する杼などの道具を生産する職人たちとつながりながら、

織物を生み出していたのである。職人の他、様々な道具類を売る機料店の存在も無視できない。さらに、織機や道具類を製作するための材木が、京都の内部あるいは他地域における別の営為との連なりの中で得られていた事実も、考察する意義は大きいだろう<sup>70)</sup>。社会における様々な連動やつながりの中で西陣機業は成り立ち、一軒一軒の日々の暮らしの中でそれぞれの職が営まれ、「西陣織」という産物は世に出されていたのである。

(京都大学大学院人間・環境学研究科 人文学連携研究者 /  
京都府立大学 日本学術振興会 特別研究員 RPD)

【謝辞】結びにあたり、本論文を執筆する契機を与えてくださり、度重なる工場の見学を快く受け入れてくださる桴職人長谷川淳一さん、富久子さんご夫婦、また織匠平居の皆様に感謝の意を表します。殊に京都府で最後の桴職人でいらっしゃる長谷川淳一さんの桴製作に対するご姿勢とお話から、高みを追究する職人としての生き方をはじめ、多くの事柄を学ばせていただきました。ご多幸を祈念するとともに、ここに深謝申し上げます。

#### 【注】

- 1) 佐々木信三郎 1932. 『西陣史』芸艸堂, 140 頁。
- 2) 前掲 1)。
- 3) 大宮通での絹業も同様に、旧織部司に近い大宮通で盛んになったのではないかと考えられている。前掲 1), 141 頁。
- 4) 前掲 1), 141 頁。
- 5) 前掲 1), 162 頁。
- 6) 林屋辰三郎責任編集 1972. 『京都の歴史 5 近世の展開』学藝書林, 356-357 頁。
- 7) 前掲 6), 358-360 頁。
- 8) 前掲 1), 178 頁。
- 9) 前掲 1), 181 頁。
- 10) 前掲 1), 257 頁。
- 11) 粗悪品が流行し、官の御召品、諸侯の御用品に類似の紛い物が出て、官および諸家の由緒を冒瀆する、という旨の嘆願書を幕府に提出し、株仲間再興を果たしたとされる。前掲 1), 257 頁。
- 12) たとえば天保 10 (1839) 年には 3310 軒であった織屋が嘉永 5 (1852) 年には 1056 軒となっている(堀江栄一・後藤 靖 1950. 『西陣機業の研究』有斐閣, 9)。また糸価は開港前と比して文久元 (1861) 年には約 2 倍、文久 3 (1863) 年には約 3 倍、慶應 3 (1867) 年には約 5 倍となった。林屋辰三郎責任編集 1972. 『京都の歴史 7 維新の激動』学藝書林, 154 頁。
- 13) 明治 10 (1877) 年には、京都府知事植村正直から、粗悪品を一掃し西陣織の信用回復に努めるよう布達が出されるほどであった。山岡景命編 1891. 『西陣織物沿革提要』三景堂, 32 頁。
- 14) 京都商工会議所百年史編纂委員会編 1985. 『京都経済の百年』京都商工会議所, 41-42, 73 頁。
- 15) 黒松 巖編 1965. 『西陣機業の研究』ミネルヴァ書房, 19-20 頁。
- 16) 前掲 14)。
- 17) 西陣織物工業組合編 1972. 『組合史—西陣織物工業組合二十年の歩み—』西陣織物工業組合, 527 頁。

昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

- 18) 京都商工会議所百年史編纂委員会編 1982.『京都経済の百年 資料編』京都商工会議所, 247 頁。
- 19) 前掲 17), 283 頁。
- 20) 前掲 14), 16 頁。
- 21) 林屋辰三郎責任編集 1972.『京都の歴史 8 古都の近代』学藝書林, 401。
- 22) 前掲 17), 144 頁, 前掲 13), 294-295 頁。僧侶の袈裟を織る許可が多少下りたが, 大半の機屋は軍需品としてのパラシュートやそのバンド, また兵隊へ物資を送付する際に用いる麻袋を織っていたという。たとえば織機に用いる杼についても, パラシュートを織るための織機に合わせた杼を製作していたということである(長谷川杼製作所 2015.『国選定保存技術「杼製作」保持者 長谷川淳一 杼づくりに見る西陣の伝統』長谷川杼製作所, 4 頁, および杼職人長谷川淳一さんへの聞き取り調査より)。
- 23) 西陣織工業組合 1996.『西陣年鑑』西陣織工業組合, 116。「機織機をガチャンと1回織れば万の儲けになる」との意味から「ガチャマン景気」という言葉が使われ, また「帯は西陣」というキャッチフレーズが通るほど, 高度経済成長期には西陣織がよく売れたという(杼職人長谷川淳一さんへの聞き取り調査より)。
- 24) 堀江・後藤は, 機織においては, 帯地・金襴・ピロード部門に比べ, 着尺・広巾部門での力織機化が進んでいることを述べている(堀江・後藤 1950: 67)。
- 25) 前掲 14), 139 頁。
- 26) 前掲 14), 33 頁。
- 27) 前掲 14), 53-64 頁。
- 28) 前掲 14), 46, 138 頁。この点に関しては, 本庄も既に指摘するところであり, 戦前から種々の流通経路が存在していたと考えられる(本庄榮治郎 1930.『増訂改版 西陣研究』改造社, 250-251)。また黒松は, 帯地・着尺の他, 金襴, ピロードなど部門によって流通経路に違いがあることも示している。前掲 14), 44-46 頁。
- 29) 前掲 14), 48 頁。
- 30) 前掲 14), 138 頁。
- 31) 前掲 14)。「組合史」編纂委員会 1975.『組合史』西陣織物産地問屋協同組合。
- 32) 柿野欽吾 1999. 西陣織工業の変容—産業集積の視点からみて—。同志社商学 51(1), 133-160。
- 33) 本庄 (1930), 7 頁。
- 34) 昭和 30 年に発行された『西陣機業調査報告書』の内容が記載されている。西陣織物工業組合 1959.『西陣年鑑』西陣織物工業組合。前掲 14), 170 頁。
- 35) 西陣年鑑 (1959) 13 頁。
- 36) 西陣年鑑 (1959)。同書には昭和 33 年に発行された『西陣機業生産動態調査報告書』の内容が記載されている。
- 37) 前掲 14), 194 頁。
- 38) 昭和 48 (1973) 年に, 西陣織物工業組合は西陣着尺織物工業組合および西陣毛織物工業組合と合併し, 西陣織工業組合が発足した。前掲 14), および『西陣年鑑』(1996), 175 頁。
- 39) 西陣織物同業協同組合における帯地部の組合員として, 419 名の名簿が記載されている。西陣年鑑刊行委員会編 1956.『西陣年鑑』西陣織物同業協同組合・西陣着尺織物協同組合。
- 40) 西陣織物工業組合における帯地部の組合員として, 1017 名の名簿が記載されている。西陣年鑑 (1959)。
- 41) 昭和 34 年版に載る「西陣機業生産動態調査」は, 「西陣織物の自営業者」の「殆んど 100%」である 2300 軒を調査対象とした, とある。西陣年鑑 (1959), 13-14 頁。
- 42) 西陣織物工業組合, 西陣着尺織物工業組合, 西陣毛織工業組合, 相互着尺織物協同組合, 朝鮮人西陣織

物工業協同組合、京都織物卸商協会、西陣織物買継協同会、京都生糸問屋協会、京都金銀糸工業協同組合、京都化繊糸卸商協会、京都府縫糸工業協同組合、京都府撚糸協同組合、西陣綜統工業協同組合、西陣意匠紋紙工業協同組合、京都府繊維染色協同組合、西陣織物整理加工協同組合、日本染織図案家連盟、西陣クラブの組合員名簿が掲載されている。各組合員名簿によって、たとえば学区の記載はない等の違いが存在する。

- 43) なお、その後の『西陣年鑑』は2年から7年の間隔で出版され、本文記載の項目の他、組合員規則や西陣関連団体一覧と名簿、西陣関連年表等が掲載される場合もある。1959年の後には、1963年、1965年、1969年、1973年、1976年、1978年、1982年、1985年、1990年、1996年、2003年、2008年、2013年、2019年に発行されている。本文で述べたように1973年からは発行主体が西陣織物工業組合から西陣織工業組合となる。
- 44) 第2次期業調査である「西陣機業生産動態調査」は昭和33年3月に実施された。昭和32年の1月から12月までの月別生産量、生産額、稼働機台数、従業員数について聞き取り調査が行われた。西陣年鑑(1959)、14頁。
- 45) 前掲14)、38頁。
- 46) 前掲14)、39-40頁。
- 47) 帯地部組合員1017名のうち、2名は2軒の工場を所有するため、所在地を示すべき工場軒数は1019軒となる。また、「西陣機業生産動態調査」における帯地の業者軒数は専業・兼業合わせて997軒であるから、西陣織物工業組合員名簿の帯地部門掲載数1019軒とは22軒の差が生じている。この差の理由については、次の2つが考えられる。まず、機業調査において、調査対象から除外された機業者(「賃織業であったため調査を必要としなかったもの」365軒、「所在不明のもの」69軒、「他地区のみで製織しているもの」12軒)であった可能性、二つ目は調査が非成立の業者(21軒)であった可能性である(前掲34、14頁)。そのどちらに、或いは両方に上記差異分の22軒が当てはまるのかは、本研究のみでは明らかにし得ない。
- 48) 本論文で参照したものは、京都大学文学研究科図書館が所蔵し、原本の写本と考えられるもの(奥付けに「大正七年謄寫」とあり)、および西陣五百年記念事業協議会1969、『西陣-美と伝統-』西陣五百年記念事業協議会、296-332頁に所収される原本の翻刻である。
- 49) 駒 敏郎 1977、『天狗筆記物語-私説西陣の歴史-』西陣織工業組合。
- 50) 『西陣天狗筆記』下巻の序文には、「弘化二年乙巳九月」と叙述年月が記載されているが、下巻の末尾には「天保十五年甲辰歳九月」と記されて結びれており、さらに奉行所へ差し出した嘉永三年の嘆願書が追録されていることから、天保15年から嘉永3年の執筆とした。
- 51) 前掲48)。
- 52) 駒は、政因が「使命感」をもって『西陣天狗筆記』を記した、としている。前掲48)、89頁。
- 53) 西陣五百年記念事業協議会(1969)、331-332頁。
- 54) 前掲48)、249頁。
- 55) 前掲6)、361頁、本庄(1930)、8頁。
- 56) たとえば桴職人長谷川淳一さんの場合は、明治中期頃に長谷川さんの御祖父が西陣織の景気が良いからと桴職人になられたとのことである(長谷川淳一さんへの聞き取り調査より)。
- 57) 京都織物卸商業組合1979、『室町 その成立と進展』京都織物卸商業組合、40。
- 58) 前掲14)、140頁。
- 59) 前掲14)、149頁。
- 60) 前掲14)、46頁。



昭和34年の機屋分布にみる西陣織産業の空間構造（阿部美香）

- 61) 本庄（1930）にも、機業家との信頼が甚だ厚く、とある。本庄（1930），156頁。
- 62) 前掲14），145頁。
- 63) 前掲14），148頁。
- 64) 前掲14），148頁。
- 65) 立命館大学人文科学研究所 1957.『家業—京都室町織物問屋の研究—』立命館大学人文科学研究所，202。
- 66) 前掲56），37頁。
- 67) 前掲64），205頁，前掲56），4頁。
- 68) 前掲56），38頁。
- 69) 前掲64），218-224頁。
- 70) たとえば桴の製作に用いる堅固な赤檜は、祇園祭で巡行する山鉾の車輪用木材が九州から京都へ運搬される時、同時に運び込まれていたという（桴職人長谷川淳一さんへの聞き取り調査より）。

【文献】

- 井関政因 1844-1850頃.『西陣天狗筆記』京都大学文学研究科図書館蔵.
- 柿野欽吾 1999. 西陣織工業の変容—産業集積の視点からみて—. 同志社商学 51(1), 133-160.
- 京都織物卸商業組合 1979.『室町 その成立と進展』京都織物卸商業組合.
- 京都商工会議所百年史編纂委員会編 1982.『京都経済の百年 資料編』京都商工会議所.
- 京都商工会議所百年史編纂委員会編 1985.『京都経済の百年』京都商工会議所.
- 「組合史」編纂委員会 1975.『組合史』西陣織物産地問屋協同組合.
- 黒松 巖編 1965.『西陣機業の研究』ミネルヴァ書房.
- 駒 敏郎 1977.『天狗筆記物語—私説西陣の歴史—』西陣織工業組合.
- 佐々木信三郎 1932.『西陣史』芸艸堂.
- 西陣織物工業組合 1959.『西陣年鑑』西陣織物工業組合.
- 西陣織物工業組合編 1972.『組合史—西陣織物工業組合二十年の歩み—』西陣織物工業組合.
- 西陣織工業組合 1996.『西陣年鑑』西陣織工業組合.
- 西陣五百年記念事業協議会 1969.『西陣—美と伝統—』西陣五百年記念事業協議会.
- 西陣年鑑刊行委員会編 1956.『西陣年鑑』西陣織物同業協同組合・西陣着尺織物協同組合.
- 長谷川桴製作所 2015.『国選定保存技術「桴製作」保持者 長谷川淳一 桴づくりに見る西陣の伝統』長谷川桴製作所.
- 林屋辰三郎責任編集 1972.『京都の歴史 5 近世の展開』学藝書林.
- 林屋辰三郎責任編集 1972.『京都の歴史 7 維新の激動』学藝書林.
- 林屋辰三郎責任編集 1972.『京都の歴史 8 古都の近代』学藝書林.
- 堀江栄一・後藤 靖 1950.『西陣機業の研究』有斐閣.
- 本庄榮治郎 1930.『増訂改版 西陣研究』改造社.
- 立命館大学人文科学研究所 1957.『家業—京都室町織物問屋の研究—』立命館大学人文科学研究所.
- 山岡景命編 1891.『西陣織物沿革提要』三景堂.